

議 事 録

会議名	令和元年度川西市総合教育会議(第1回)		
事務局(担当課)	企画財政課		
開催日時	令和元年9月26日(木) 16時00分から17時30分		
開催場所	川西市役所 4階 庁議室		
出席者	委員	川西市 越田市長 川西市教育委員会 石田教育長、加藤委員、服部委員、坂本委員、治部委員	
	関係職員	松木総合政策部長、若生教育推進部長、中塚こども未来部長	
	事務局	総合政策部企画財政課 今岡課長、藤原	
傍聴の可否	可	傍聴者数	3人
傍聴不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 開会 2 議事 これからの教育の取り組みについて 3 その他		
会議結果			

会議経過

発言者	発言内容等
事務局	<p>それでは、ただいまより第1回川西市総合教育会議を開会いたします。 開会に当たり、総合教育会議の主宰者であります越田市長からご挨拶をさせていただきます。</p>
越田市長	<p>皆さん、こんにちは。お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。 今年度第1回目の総合教育会議を開会いたします。ここで、3期12年にわたりまして川西市の教育行政の先頭に立って引っ張っていただきました加藤委員が任期満了により9月末で退任されますので、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。 ありがとうございます。 加藤委員には医療の現場の専門家として貴重なご意見をいただけてまいりました。 特に最後の4年に関しましては、兵庫県市町村教育委員会連合会の会長も務めていただくなどご活躍いただき、大所高所からいろんなご意見をいただいたというふうに聞いております。 心から御礼を申し上げますとともに、引き続き市政へのご協力もいただければと思いますので、よろしくお願いいたします。 それぞれの立場で、同じ方向を向きながら、子どもたちを真ん中に置いてしっかりと川西の教育行政を進めて参りたいと思います。限られた時間でそのすべてを議論し尽くすことはできませんが、それぞれの思いを突き合わせていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。</p>
事務局	<p>ありがとうございました。 これよりの会議の進行につきましては、越田市長にお願いしたいと思っております。</p>
越田市長	<p>それでは私のほうで議事進行させていただきたいと思っております。 まず「これからの教育の取り組みについて」を議題といたします。教育長からご説明をよろしくお願いいたします。</p>
石田教育長	<p>川西市の教育の基本理念は、「地域と人の輪でつくる 育ち学び合う 教育の推進」であります。 他市にはあまり例がない学校教育・社会教育を所管する教育推進部と幼児教育・青少年育成を支援することも未来部の両方を教育委員会で所管し、その特徴を活かした取り組みを進めていきたいと考えています。 また、日頃、市長からは教育委員には各分野において一定の知見をお持ちの方々にご就任いただき、その知見を活かした視点から川西の教育を活性化させていただきたいというお話をいただいております。 本日は各委員から順番に、学校教育についてそれぞれの知見からお話を伺い、協議できたらと考えていますので、よろしくお願いいたします。 服部委員、お願いします。</p>

発言者	発言内容等
服部委員	<p>それでは私のほうからお話をさせていただきます。資料の「里山体験学習林購入および整備について」をご覧ください。</p> <p>まず、1番目の「里山体験学習」についてです。</p> <p>ご存知のとおり、兵庫県は小学校3年生の「環境体験事業」と小学校5年生の「自然学校推進事業」を進めている体験学習の先進県であります。川西市では、これらに加えて他市町では実施していない「里山体験学習」という体験学習を小学校4年生で特別に実施しています。これにより小学校3年生、4年生、5年生における体験学習が有機的に体系化され、体験学習の効果を上げてきました。</p> <p>また、これらの事業により、子どもたちのみならず、市民にもふるさと意識を醸成させた実績は非常に大きいものと考えております。</p> <p>次に、2番目の「里山体験学習林の整備」についてです。</p> <p>そのような中、昨年度から黒川の里山林が売りに出されました。それをどう活用するかということですが、小学校4年生の「里山体験学習」が、大きな効果を上げてきましたが、その体験学習を実施する里山林そのものの整備が十分できていなかった。</p> <p>「里山体験学習」を行う上で中核となる樹林が必要と考えられますが、売りに出された大谷里山林は、市内で最も優れた台場クヌギより構成され、利便性も良好であります。</p> <p>そこで、4年生の「里山体験学習林」として大谷里山林を購入していただき、整備していただけないかということをご説明させていただきます。</p> <p>その前に、この地域がどれだけ重要なのかということをご説明させていただきますが、本地域一帯は既に日本一の里山林と言われており、環境省も認めております。</p> <p>文化財と比較した場合の重要性はどうかと、いつも聞かれますが、実は天然記念物も文化財の一つであります。そのように考えると、黒川里山林というものは、加茂遺跡に勝るとも劣らない素晴らしいものでありますので、自然の文化財であり、きわめて重要な大谷里山林の保全及び活用については、是非、市によって進めていただきたいと思います。</p> <p>続いて、3番目の「里山体験学習林の今後のあり方」ですが、大谷里山林を天然記念物指定にもっていく。既に黒川の能勢電鉄の里山林は天然記念物指定されておりますが、能勢電鉄の里山林よりは面積も2倍、3倍で台場クヌギも多く、天然記念物に指定されるのは確実であります。天然記念物指定に向かうという方向性、あるいは里山体験学習林の方向性が明確になれば、兵庫県阪神北県民局の北摂里山博物館運営協議会の支援のもと、北摂里山博物館の中核施設としての位置づけや北摂里山大学演習林としての活用も進めていくことができます。</p> <p>ですから、県と市が一体となって活用できるのではないかと考えられます。</p> <p>あと管理の問題が、今まで川西市は7件天然記念物指定されてきましたが、すべて市民団体がついております。市民の里山林保全への意識は非常に高く、ここも、もうすでに里山整備の担い手としての市民ボランティア団体が立ち上がっておりますので、管理に関しては問題ないというふうに考えます。</p> <p>次に、4番目の「購入のための予算」になりますが、やはり一番は予算の問題をどうするのかということですが、</p> <p>たまたま、令和元年からパリ協定の枠組みの下において、災害防止等を図るため森林整備等に必要な地方財源を安定的に確保するために林野庁から森林環境譲与税というのが創設されています。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>既に川西市にも 600 万円ほど譲与されているわけですが、この予算を、そういうことに使えないか調べていたのですが、基本的には間伐や人材育成・担い手の確保、普及啓発等の森林整備、木材利用等が森林環境譲与税の主な用途とされておりますが、森林環境教育の場として活用する場合には、土地の購入も可とされております。まさに、川西市は 10 年も前から「里山体験学習」ということで、実施しているわけですからこの購入はまさに合致し、兵庫県の担当部局に確認した結果も、このような場合の購入はまず問題ないであろうとの回答をいただいております。</p> <p>森林環境譲与税、我々これから 1 年間に一人当たり 1,000 円程徴収されますが、森林環境譲与税は今後 10 年以上も続き、川西市にも配分されますが、まずは、大谷里山林の購入をお願いし、さらには他の里山林や人工林の整備を是非、進めていただきたいと願います。</p> <p>5 番目は「観光資源としての黒川」でございますが、黒川には日本一の里山林としてのクヌギ林が存在するだけでなく、現在も生産が続く炭窯、黒川小学校舎、大谷鉦山跡、妙見の森ケーブルやリフト、能勢妙見山、ダリヤ園、知明湖キャンプ場など観光資源がたくさん揃っています。それらに加えて、妙見山のブナ林、5 カ所にも及ぶエドヒガンの群生地、生物多様性保全拠点など観光資源は非常に多い。しかし、これらの資源も残念ながらほとんどが活用されていません。まずは、こういった資源の活用を考えるうえで、教育委員会としてはこれらの資源の文化財指定、天然記念物も文化財の一つなのですが進めていきたいと考えています。</p> <p>6 番目、最後になりますが、「学校教育と社会教育の体験学習における連携」であります。今回は体験学習だけの連携を言っていますが、実は川西市の場合は学校教育、社会教育の連携も非常に進んでいます。体験学習でも進んでおりまして、小学校 3 年生の環境体験学習、例えば水明台や清和台で協力していただいております。</p> <p>それから、小学校 4 年生の体験学習では菊炭友の会なんか協力していただいております。学校教育と社会教育の連携ということでも川西市は非常に進んでいるのではないかと思います。</p> <p>そのモデル式を図 1 であらわしたのですが、社会教育プログラムの中に学校教育の体験学習の支援等に関する講義科目を開講し、さらに学校教育へと活かすシステムづくりというものが、今後必要になってくると考えております。</p> <p>社会教育の中で行われている多くの講義にたくさんの市民が学んでいることは、これも川西市の大きな特徴ではないかと考えられます。それらの市民の活力を学校の体験学習支援に回していただくように努力したいというふうに考えております。</p> <p>とりあえず、まずは黒川の里山林の購入を是非、市長をお願いしたいと思っております。</p> <p>ありがとうございます。</p> <p>皆さんから、それぞれご提案いただきたいと思いますが、進め方として、一つご提案いただいて、そのテーマについて少し皆さんでディスカッションした後、次のテーマへと行かせていただきたいと思っております。</p> <p>今の服部委員のご提案に対する私も含めた基本的な考え方を申し上げさせていただきます。まさに環境教育が川西市の教育の一つの大きな特徴だというのは、私も市長になって、いろんな方とお話をする中で、そういう言葉が出てきます。おそらく服部委員がご心配しているように、それが必ずしも定着してないのでは</p>

発言者	発言内容等
服部委員	<p>ないかという点に関しては、私はある種、時間軸が必要なのかなと感じています。</p> <p>つまり、私は丹波少年自然の家に小学校 5 年生が校外学習として実証実験かなんかで行った一番最初の世代です。</p> <p>そういった世代が大人になって、自分の子どもも行くことになってお父さんお母さんも同じように行ったんだよと、これが川西の教育なんだよというように、少し時間軸として、地道な取り組みが必要だと感じております。まだまだ市民の皆さんに、それが川西の教育の一つの大きな柱なんだというところまで認識がいてないかもしれないかもしれませんが、私としてもこの事業をしっかり継続していきたいというのは、教育委員会、教育長とも一致している点であります。</p> <p>一方、ご要望いただいた里山林の購入の件に関しましては、財源論でいうと里山ですので、市の財政を圧迫するという金額ではないと思いますが、むしろこの里山を市が購入し管理をするという、その必然性、理論、なぜそこなんだということが、明確にならないうちに、この山だけ貴重だと思うから買いますということは、行政が体系だって動くという点において、全体の議論にもなりますので、そこは慎重に考えています。一番いいのはやはり民の力と公の力が一緒に協働して、何かできないかということは、一緒に考えさせていただきたいと思います。</p> <p>ただ、ご指摘いただいた通り、森林環境譲与税が、特に 1 年目でありましたので、我々、市長部局として、本年度、非常に慎重に、色々な協議をする中で具体的な用途まで踏み込めなかった。我々も県と議論をする中で、我々が想像以上に幅広く活用できるのではないかという手応えは感じておりますので、従来の環境教育で、服部委員からご提案いただいたような社会教育等と連携して、その費用を充てていくということについては、今後教育長、教育委員会の皆さんと少し議論をさせていただければなと思っています。</p> <p>服部委員からもお話がありましたように、ボランティア団体がもう現場にも入って、実際に動いていただいておりますので、環境教育が市の大きな柱の一つだと言いながら、山を切っちゃって自然を大切にしなければ、そもそものコンテンツが無くなってしまうところだと思いますので、そこはしっかりと両立させていただきたいな思っています。</p> <p>それが、今の我々の思いですので、もし皆さんの思い、追加とか補足がございましたら、少しディスカッションさせていただければと思います。</p> <p>ありがとうございます。黒川の里山の重要性に関してですが、普通程度の重要性であれば市民団体が購入して、それを自分たちで管理していくというのは大賛成で、すでに日本の自然の中でも、市民団体が購入して頑張っている所はあります。</p> <p>ところが、黒川の場合は、市民レベルで管理するようなレベルではない。たとえば、加茂遺跡を市民団体が購入して管理するというようなことをするかといったら、そういうことにはなりません。</p> <p>だから、天皇陵もそうですが、僕はそれに匹敵するような重要なもので、川西市の看板であると思う。</p> <p>まさに文化財の中の文化財であると思っています。今、我々が購入して持っていますけれども、やはり我々もいずれ死んでいくと、きちっとした管理ができなくなってくる。普通の里山ではそれでも構わないけれども、これやっぱり国の財産ですので、それぐらい重要なものであるというところで、何とか川西市できちっと方向性を持っていただきたいというふうに考えています。</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>そこは大きく、文化財的などところと、環境政策としての位置付けをどうしていくのかということで、今すぐに買いますという話ではないということだけ、少しご理解をいただければなとは思いますが、黒川の重要性、それが川西市にとって大きな財産で、守るべきものだということは、私も共通の認識です。ただ、少しそのアプローチを、服部委員のおっしゃっている管理がいいのか、私どものパートナーシップの形式がいいのかということも含め、もう少し、土地を買ってから何かビジョンをつくるというよりも、むしろ全体のビジョンの中で、この場所をどうしていくのかということが基本的な進め方かなと思っていますので、ここは引き続き、我々もしっかり研究していきたいと思っています。</p>
服部委員	<p>その重要性で文化財的と言われましたが、天然記念物も文化財の一つなんです。いつも天然記念物だけが文化財から外されてしまっているところがありますが、川西市である方向を出していただくと、県民局は応援すると言われていまして、是非ともよろしく願います。</p>
石田教育長	<p>それでは続きまして、坂本委員のほうからよろしく願います。</p>
坂本委員	<p>よろしく願います。</p> <p>私は保護者ということで、4人の子どもを川西で産み育てておりまして、公立の幼稚園、小学校、中学校に通わせているんですけども、そうしたことで、現場の声が一番近いという自負がありまして、ずっとPTAをさせてもらっているんです。前回も言わせていただいたのですけれども、やはりPTA活動は、子どもの健やかな学びを応援することであると同時に、私たちが社会教育をするスタートになっているといえますか、そのような存在だということが私の中で変わらなくあります。本当にいろんな声や意見が、こういう場に集まって出せるっていうところが、すごくいいなと思っています。</p> <p>PTAは社会教育の一環であるけれども、形を変えながら、今の形がやりやすいのかな、どうしたらいいのかといったところを教育委員会でもやっていければいいなと思っています。</p> <p>あと公民館ですけども、私は子どもが小さいとき、福祉グループに入ってたんですけども、教育委員になってから改めているいろんな講座に参加させていただき、実際に受講されている方や講師の先生方とお話をさせていただく機会がありまして、もう70歳を超えたような方々が、本当に熱心に学ばれているんですね。感動する場面もいっぱい見させていただいているんですけども、講師の先生からも、やっぱりせっかくここでこんなに色々学んでいるんだから、地域に還元できる仕掛けがあればいいのになんていうことを凄く言われています。</p> <p>他市の取り組みであるとか、大学と地域との連携であるとか、色々聞かせていただきましたので、川西市でもできればいいなと思っています。</p> <p>実際に、服部委員がおっしゃったように、市民ボランティアの方がずっと里山の保全に関わってくださったりとか、小学校4年生の時の、里山体験学習のときにも、関わってくださっているので、市民の力って凄く大きいと感じています。</p> <p>また、現在、市内には3校の県立高校がありますが、昔、川西に高校をということ</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>で活動し誘致するのに一所懸命頑張った時代がありまして、3校あるんですけども、今、子どもが減っている中で、定員割れを起こしている高校がある、他市の高校に流れている現状があるというふうに聞いています。</p> <p>せっかく高校が近くにありますので、川西市にある高校の良さをもっと知って欲しいなという思いがすごくあります。</p> <p>幼保小中と連携が取れたなら、もっと川西の高校の良さを意識するきっかけになるかもしれません。</p> <p>現在、北陵高校では地域の小学校に化学教室のお手伝いなどをされていたりとか、明峰高校でしたらパソコン教室であるとか地域セミナーですとか地域の人に開放した講座とかがあるんですね。</p> <p>しかし、やはり高校が発信している分には、そんなに広がらなかったり、もう少しいるんな小中、高校受験を迎える子どもたちにまで、そういった活動が届きにくいのかなと感じています。</p> <p>これから、新学習指導要領により小学校でプログラミング教育が必修化されますが、例えば、高校生が子どもたちにだけ教えるのではなく、先生に、こんな新しいやり方があるんですよといったレクチャーをする会であったり、明峰高校でしたら、グローバルキャリアの子たちもいるので、そこに小学生が入って楽しく英語を学ぶとか、いろんなやり方があるのではないのでしょうか。</p> <p>例えば中学校の女子の体育では、ダンスが必修化されてだいぶ経つのですけれども、新たな踊り方であるとかスキルを教えてもらうといった形があれば、きっと小中との関わりも増えて、川西の子どもたちが地元の高校に行くのではないかなと、もちろん、これが正しいという訳ではないですが、せっかくある県立高校をもっと繋げていけたらお互いにいいのではないかなと思っています。</p> <p>あとですね、今月、明峰高校のPTAでは全生徒と保護者向けの講演会に川西市PTA連合会会員の方々にもご参加いただき、ともに学び深める機会を得ることができました。このように色々な形で、自分たちの高校、自分たちの中学校だけで学んで終わるのではなくて、交差しながら学べたらいいかなと思っています。</p> <p>子供の成長は途切れることなくずっと連続しています。もっといくなれば人自身の成長も生まれてから死ぬまでずっと連続しているので、校種とか枠を超えて学びを交差しながら、互いの学びを深めていけるような学びのコーディネート教育委員会としていきたいなと思っています。</p> <p>はい、ありがとうございます。</p> <p>坂本委員は、誰よりも現場に入っていていただいているので、我々としても坂本委員にとっても期待をしていますし、頼りにしているということをまずは冒頭申し上げたいと思います。3点いただきました。まず、高校との連携、これははまさに今、教育長も含めて、絶対やるべしだろうと考えております。</p> <p>それは私も県会議員をしていたので感じていますし、加藤委員なんかもよくご存知かと思いますが、県立高校は徐々に、どうやって縮小をしていくのかということを検討せざるをえない時代になっています。しかし、高校がなくなるということは我々にとってとても大きなダメージになりますので、やはり高校を守っていかないとはいけません。そのためには、県の管轄だからと言うのではなくて、そこを乗り越えて、教育委員会としての連携もそうですし、我々、市長部局としても一緒にやっていかないとはいけないんじゃないかとそのように考えております。</p>

発言者	発言内容等
	<p>まさに今日、議会でもご説明をさせていただいたのですが、本年度から実施します子どもの自主活動支援事業では、高校の方にもしっかりと働きかけて、高校生たちに参加していただくといった取り組みをおこなっていますし、そうした取り組みなどを通じて我々でしっかりと高校を守っていきたいと思います。</p> <p>次に、PTA あり方検討委員会に関しましては1回目と2回目で傍聴者もふえて注目度が上がっておりますが、やはり先ほどおっしゃっていただいた通り、PTA は全ての子どもたちのために活動する社会教育団体であります。私の問題意識は社会環境が大きく変わっているので、その時代に合わせて PTA のあり方を、みんなが参加しやすい方法を考えましょう。PTA が終わった後に、終わってよかったしんどかったと泣くのではなくて、楽しかった来年もやりたいと言えるような PTA の活動にしないといけないですし、PTA がなかったら、学校の活動ができないんだということはもちろん、今の学校の現実としては、地域の皆さんにご協力をいただかなければいけないんですが、やはり、あるべき論というか、役割分担というのは明確にしておいたほうがいいですねという、そういった問題意識であります。そういう意味で PTA 活動をとおしてそこから社会に入っていく、繋がりがあるところの役割は重要だということとは私も認識をしています。</p> <p>最後の公民館の部分ですが、私もお話を聞きながらどうしたらいいのかなと悩んでおります。レフネックもそうですが、やはり同じ方、リピーターがたくさんいらっしゃって、我々としてはそこで卵として生まれ出たのが地域の中に飛び立って、そこで羽ばたいていただきたいと思って期待しているのですが、なかなかそこに繋がらないところを、私どももちょっと悩んでおります。</p> <p>ここは是非、皆さんと意見交換させていただきたいと思っております。</p>
坂本委員	<p>NPO コアネットさんが明峰公民館で講座を開いておられます。</p> <p>この方々は、プログラミングを体験させてくださる団体なんですけれども、公民館でそのプログラムを自分自身も当然、学べるんですけど、やっぱり受講者が、例えば子どもたちの近くでありますよみたいな、ここで受講した人がそこにいますよみたいな、準備ができていますので何人かは参加されてたんですね。そこで楽しくなれば、また次の学びになって、今度自分で教えてみようかという形になるのではないかなというところで、ちょっとした仕掛けがいるのかなと思います。</p>
越田市長	<p>おそらく、私が感じて問題点というのは、マッチングがやはりできてない、つまり、子どもたちがいろいろ助けて欲しい、手伝って欲しいと思っていることと、大人たちができる、やりたいということが、必ずしも一致していないケースであったり、そこに対応するものや人がなかったりといったことが、何かあるのではないかなと、そのいったミスマッチの部分で、困っていることと、できることが何かを出し合える場所とコーディネーターをする人が必要なのかなと、理屈としては思うんですけれども、それをどうしたらいいのか一緒に考えさせていただければと思います。</p>
石田教育長	<p>教育委員会としてもこれは長らく課題であります。</p> <p>やはり社会教育の発表の場、閉じた中で発表するだけでなく、もう少し、いろんなところで評価されるような発表の場を持っていく必要もあるのかなと。</p> <p>一つは市長からご提案いただきましたが、学校教育との連携もあると思います。</p> <p>実際その学校教育にゲストティーチャーとして入っていただくためには、教員自</p>

発言者	発言内容等
治部委員	<p>身がその意識を持たないといけないという側面があると思います。一つは、今進めています地域学校協働本部といった形で、地域の方に紹介していただく、繋ぎをしていただくとか、それから教員自身も社会教育の中に入って行って、こういう学びがあるんだということを知る場面をつくっていかねばならないのかなと思っています。</p> <p>一朝一夕には、もちろんいかないんですけども、いろんな施策を通じて、そういう視野を広げていくことが大事かなと思っています。</p> <p>私のほうからは以上ですが、他によろしいですか。</p> <p>それでは治部委員、よろしくお願いします。</p> <p>教育委員の治部でございます。</p> <p>まず 1 個目ですが、保育と幼児教育の質の向上を私ども目指しています。そのために、保育の環境を客観的に測る指標と有用性というものについて、議論するチームを立ち上げました。教育委員会の中にチームを作って、複数の指標の中から客観的に、どういう指標が川西市の幼児教育、保育の質を高めるんだらうかというのを、議論、検討して 1 個ピックアップしたのが ECERS(エカース)というものなんですね。この ECERS というもの、これからアセスメントの仕方、指標の取り方というものをチームの中で深めていき、順次、披露していきたいなというふうにプランしていきます。</p> <p>幼児教育を定義すると、やはり幼稚園教育要領も保育所指針も経済開発協力機構 OECD も比較的似通った見解を出しておりまして、特に幼児期は環境の中に主体的に子どもがアクセスするような状況が必要なんじゃないかという似通った見解なんです。先ほど市長が述べられた、教えたいことと教えられたいことの違いがもしかしたらってキーワードも、ここと結び付けて考えていたんですけども、いわゆるしっかりしたプログラムを大人、教員が教えるというよりも子どもたちが主体的にアクセスできる環境を整えるということも非常に大切なことだと思っているんですね。そのための ECERS というものが、今、ひとつ動きは始めているというのが 1 点目です。</p> <p>次、2 点目ですが、ここでキーワードとなるのが認知と非認知、この言葉自体があんまりピンときませんので社会情緒的コンピテンスみたいな言葉の方がじっくりくかもしれませんが、読み書き計算そういう認知的なスキルと非認知、例えば長期的な目標に向かっていく力だったり、ちょっとストレスを受けたときに跳ね返す力だったり、皆で行動する力だったり、これが 21 世紀の教育だというふうに言われていますので、このバランスを考えたときに、やっぱり非認知の方がちょっと、一般的な認識が薄いのではないかと僕は思うんですね。</p> <p>なので、この非認知スキルという概念を地域の方に少しずつ提供して行って、有機的にバランスよく取り込んでいくといったアプローチを今後どのようにすればいいのかということを考えていきたいなと思います。小学生の保護者や教員が対象なのか、保育所に通われている保護者なのか、市長のご意見も一緒に伺えたらいいなと思って今回、お話をしました。</p> <p>次、3 個目のトピックがはじめなんですけれども、いじめの改善に真剣に取り組みたいと思っております。これにもいくつか指標がありますし、考え方、プログラムがありますが、一つ私が提案したいと思って投げかけているのが、いじめが起きたときにどうやって加害者、被害者に介入していくのかというのではなくて、いじめが起こる前の環境にかなり大きなヒントがあるんじゃないかといったところからはじまるプロジェクトがあるんです。例えば、いじめ問題について学校風土を調査したり、客観的な科学的根拠に基づいた生徒指導の方法を教職員が学習や共有したりする包括的なプロ</p>

発言者	発言内容等
	<p>グラムを、少しずつ広めていきたいというのが、今の私の思いなんです。</p> <p>そして、最後 4 点目が特別支援教育に関することです。市内の主に小中学校の特別支援教育の先生方と交流を図る機会を模索したいと、今、私思っております。川西市には特別支援教育に対する教育のプロジェクト、仕組みがものすごく一杯あるんです。なので、そこはまた別の、今、自分の立場で何がきるかを考えたときに、もうちょっと、ディスカッションベースで先生たちと同じ立場で話し合う場みたいなのを設けられたら、現場の教職員の方々のお役に立てるんじゃないかなと思っているんです。</p> <p>まずは、特別支援教育の先生方もしくは介助員の方たちとミーティング、ディスカッションをする中で具体的なニーズを把握していきたいと思えますね。これが多分、今でいうアクティブ・ラーニングに繋がるはずなんです。アクティブ・ラーニングになればなるほどやはり、大人も学習して、子どもたちへの教育に反映させるんだらうなと思っているんです。</p> <p>ここまでが、今、私が思っているところです。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>まず、ECERS、非常にこれから幼児教育、保育が無償となる中で、いかに質を担保していくのか、安全性は当然のこととして、どんな指標が川西市の幼児教育・保育の質の向上を高めるのだらうかといった視点でアプローチしていただいているということで、他の自治体では導入されている事例と違ってあるんですか。</p>
治部委員	<p>少数ではありますが、いくつかはあるというふうに聞いていますが、まだ少数派ですね。</p>
越田市長	<p>ありがとうございます。</p> <p>いじめの対応とか環境教育も含めて、今後の川西の教育の目指すところ、特色といったときに学力、点数をあげて、東京大学へ何人ということが指標となるような教育は、私が市長であるうちはそういう教育環境でない方がいいなと思っております。</p> <p>どこまで教育のプログラムに踏み込むべきかという議論はあるかと思いますが、私としては、むしろ多様性や育ち、学びとかそういったことを大切にしていこうが望ましいという思いを持っていますので、こういうご提案は非常にありがたいなと思っています。</p> <p>こども未来部で、少し具体的に議論していただいていると聞いておりますので、そこは我々としても非常に期待したいと思っています。</p> <p>次に、非認知スキルですが、IQなどで数値化される認知スキルと違い非常に目に見えにくい部分なので、それをどう普及させるかということは難しいのかもしれませんが、これからどういう取り組みができるのか、教育委員会の中でしっかりと詰めていただき取り組んでいただければ、できる限りのバックアップということになるのではないかと思います。</p> <p>そして、いじめの問題、私も子育てをしていますので、非常に重要だと思っております。ご存じのとおり子どもの人権オンブズパーソンからも、今のいじめ対応というのは、どうしても子どもを加害者と被害者に振り分け、前者に厳しい指導を行っていく、謝る謝らへん、謝らせるということになってしまうので、本来、子供たちが持っている自分たちでそういったことを解決しようとか、人間関係をつくっていこうということに対</p>

発言者	発言内容等
	<p>しては、マイナスではないかという趣旨のご提案をいただいております。教育委員会としてもそういった議論をするということですので、いろんなアプローチの中で、具体的に教えていただければと思っています。</p> <p>最後に、我々としても、学校現場の皆さんを応援をするということが、やはり何より大切だと思っています。現場の皆さん非常に多忙でありますので働き方改革とか長時間勤務をいかに是正するかということは、行政と教育委員会の事務局側としてできることを、事務を減らして、本来の学んだりディスカッションしたり、子どもに向きあったりということに時間を使えるようにしていきたい、そういう方向だとお聞きしているので、そこは支援をしていきたいなと思っています。</p> <p>ただ特に現場の忙しさというのは、我々の想像を絶しているところですし、それをサポートする教育委員会事務局のほうも長時間労働が非常に続いているという状況がありますので、その辺も含めて、我々としてもできるサポートをしていきたいと思えます。</p> <p>教育長の方から、もし何かありましたら。</p>
石田教育長	<p>今、仰っていただきました様々な知見、教職員は教職員としてのものの見方、考え方、子どもへのアクセス、アセスメントの仕方に偏りがちなので、違ったところから切り口をもっていただく、その知見について教職員も学んでいくといった点は非常に大切かなと思っています。今、チーム学校という言い方をして、教える側も多様な人を構成するといった形になっておりますので、今、委員も含め市長からご提案をいただいた形で何とか教員、学校現場を巻き込みながら、豊かな学びになっていく、それが子どもに返っていくようなシステムを徐々に入れたいとは考えております。</p> <p>それでは、最後に加藤委員お願いいたします。</p>
加藤委員	<p>まず、冒頭、市長から過分なるお言葉をいただきましてありがとうございます。</p> <p>もう12年も教育委員をさせていただいて、12年前に来たときは本当に何をしたらいいかわからなかった。そのような中で、とりあえず最初に言われたことは市役所の中でたくさんお友達を作って帰って来なさいと、歯科医師会のために絶対なるし、市民の皆様のためになるよう活用できればと。それで、今振り返ってみればその使命だけは松木部長をはじめ、色んな場所にいかせてもらったことで多くの方と知り合いになれ、非常に幸せなことです。</p> <p>それでは、まず12年間を少しだけ振り返ります。先ほど市長からも言っていただきましたように最後の4年間は兵庫県市町村教育委員会連合会のほうへ行きて、後半2年間は会長をしております。全国の方の理事、評議員もしましたので、年間5回ぐらい東京へ行かせてもらったことがありました。それをもとに、今回は、今、僕がどう思っているか、どのようなことを自分で判断しているかということをお話してくださいということをご指示いただいておりますので、それで進めたいと思えます。</p> <p>まず、最初のページをめくってもらいますと、カラー刷りですけども、12年前に教育委員を仰せつかった時に、僕はもともと家が広島の呉なんですけれども、父も母もPTAに関わってないんです。僕自身も子どもが2人いて、下の子どももう就職になりましたけれども、一度もPTA活動に関わったことがないんです。それで教育委員会といっても何なのかなっていうところから入りましたので、まず、何をやっているのかわからないから最初をお願いしたことは教育委員会の議事録ありますかって訊ねたら、ありますって言われたので半年分送ってもらい、それ全部読みました。何を話し</p>

発言者	発言内容等
	<p>合われているのか、何をどうされているのかっていうのを読み解いたうえで、それでもまだね、何をどうしたらいいのか、行って賛成だけで終わるわけにはいかない。そこで最初に読み始めたのは教育委員手帳です。その中にしっかり、議案のあげ方であるとか教育長の職務、教育委員の職務であるとか色んなことが書いておりまして、その中で一番、僕が心に持たないといけないと思ったことはレイマンコントロールです。レイマンコントロールという言葉は広く社会に使われていますけれども、教育委員会が一番それにあたるんですね。ようするに素人の判断を優先、素人の目線で見なさい。大所高所から見なさい。僕は幸いなことに市長にこの間見ていただきましたけれども、歯科医師会で歯科医療懇談会というのをもっていますので、自分の歯科としてのアドバイスなりなんなりというのは、あの場でも教育長にも見ていただいていますので、教育長や教育委員も含め直接言うことができると思います。それもありましたから、歯科としてのアドバイスはやります。食育については歯科医師会としての考えもありましたからアドバイスはさせてもらったんですけども、僕のもってたところは要するに大所高所からいかに教育行政に意見を言えるか、どこが間違っているとか、疑問を広く自分の意志として持った形で見てやる。その中で、時報市町村教委、これ全国市町村教育委員会連合会が出している一般紙ですけども、その中に森隆夫先生という方が公教育の目的について書かれてありまして、簡単に言いますと義務教育の目標というのは、日本国民として必要な基礎学力を身につける、公民としてのルールを身につけるといふ、その2点に集約されるんですね。まあ、当然のように教育基本法も読みましたし、地教行法も読みましたし、何が我々にしほりがあるのかということ承知しないと、ちょっと前に進めないタイプですので、これを胸に12年ぐらいきたんですね。その次のページに書いてありますが、兵庫県の連合会が出している「はぐくみ」というものですけども、ここに会長就任のご挨拶っていうのを書きました。記載のとおり非常にすごいスピードでICT化が進んでいると、教育の現場も「ティーチャーからファシリテーター」へというようにこれからどんどん進んでいく。現場がものすごく変わっていくと言うことを皆さんに伝えたくて、この挨拶を書きました。この挨拶を書いたネタというのは、次のページになりますが、これは文科省が書いたものになりますが、この中で文科省が何を言おうとしているかといいますと、一番下の新学習指導要領の実施と学校における働き方改革、これをやるのに、society5.0時代の到来を見据え、society5.0の社会の中でどのように初等中等教育を運営していくのかということを考えてますということになっています。</p> <p>こども大事だったんですけども、私は上の四角で囲われています「知・徳・体を一体で育む「日本型学校教育」は学力水準を高め、社会性を育ててきた それを支えてきたのは、子供達の教育に志を持つ教師の献身的な取組である」と書いてあります。これを読んだときに、これは教師に対して、お礼は言ってますけれども、それが正しいとは言っていないんですね。それは、一番下を見てわかるように働き方改革をしましょう、献身的な取組はもういらないと、もうこれは完全にそっちの方向に向かった、そういったかじ取りをしているなと思っていううちに、今年になりまして、資料付けておりますけれども、文科省から6月25日に「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策」というのが出されました。その中で、25ページの「基盤となるICT環境の整備」というところで書かれてあることは「もはや学校のICT環境は、その導入が学習に効果的であるかどうかを議論する段階になく」と書いています。これ評論家書いたのではなくて文科省が最終まとめとして出しているんです。ということはICTの活用ということに関して、これはもう全く議論の余地はないんだと言ってるわけ</p>

発言者	発言内容等
	<p>なんです。よく、こういう話をしたときに、それはじゃあ ICT の使い方によって学力に差がでて、使える子はいいいけれども使えない子は伸びないというような差が出るんですねと言われるんですけど、そうじゃないんです。使うっていう大前提があって、ご飯を食べるときにはちゃんとお茶碗をもってお箸で食べましょうねというぐらいのレベルの話をしているわけです。そのロードマップがもう出ていますし、文科省は本気で、もはや ICT が必要かどうかを論じている時期ではないとはっきり出してきています。</p> <p>次のページにいきます。これはとある夏季研修会で何度も聞きましたし、ここ 2 年間ほどこの話は何度もしているんですが、3 つほど質問をだしています。「2011 年にアメリカの小学校に入学した子ども達の何パーセントは、大学卒業後、今は、存在していない仕事に就くだろう」という質問で、2011 年にニューヨーク州立大のキャシー・デビットソン先生が言っているんですが、これは非常に有名なパーセントで 65 パーセントとなっています。それだけ社会が激変するということで、その理由の一端はその次の質問で「今後 10 年から 20 年で、何パーセントの仕事がなくなる」という質問ですが、この質問は 2013 年のオックスフォード大のマイケル・A・オズボーンさんの質問ですが、もうその 3 分の 1 が過ぎています。質問の答えはというと 47 パーセントの仕事がなくなると言われていたんですね。これアメリカのデータだけではなくて、2015 年に日本の野村総研が出した答えは 48 パーセントです。ですから 47 パーセントから 48 パーセントの仕事はなくなるんです。</p> <p>で、なくなる仕事と残りそうな仕事について野村総研からいただきましたけれども、次のページ「人工知能やロボット等による代替可能性が高い 100 種の職業」とその次のページの「人工知能やロボット等による代替可能性が低い 100 種の職業」に書いてありますけれども、はじめに、なくなる確率の高い職業、見ていきますと銀行の窓口であるとか、教育委員会の関係するところであれば給食調理人はなくなる可能性が高い。それから行政事務員、行政の事務職員もなくなる可能性が高い。これ順不同ですけどもだいぶ上のほうです。それこそ、この中で自動車組立工、トヨタだって日産だって将来はない。エンジンがなくなりますからエンジンを作る必要がない。だからヤマハだってなくなるかもしれない。全部自動運転になりますと必要なのは通信ネットワークに関する技術をもっている人が強いんですね。だからトヨタの今の動き見るとテクノロジーの方へどんどんどんどんシフトしていつている。交通事故が減ってきます絶対。そうすると物が壊れなくなるというふうになりますから、トヨタや日産はその準備に入っていると聞いてはおります。ここには出ておりませんが、他のデータでは 1,000 位ぐらいまで順位つけているところもありまして、小学校教諭は 683 位でなくなるだろうと、我が歯科医師もちょうどその次ですけども 684 位なんですね。逆になくなる可能性が高くなるものとして中学校教員が 498 位で 15 パーセントの確率でなくなると。そして幼稚園教諭が 512 位で 15 パーセントの確率でなくなる。逆にのこる方の職業はというと歯科医、内科医あるいは保育士その辺は残ります。お互いに接するような職業が残ります。</p> <p>要するに AI にできることと AI にできないことの区別ができて、AI にできることはなくなるんですね。人間の仕事として、AI にできることっていうのは過去のデータの蓄積です。AI は過去のデータの蓄積がないとできませんから、将棋は絶対に勝ちます。オセロも勝ちます。チェスも勝ちます。逆に新しい言語を作ったりとかは AI に勝てると思うんですね。まだ誰も全然知らないような新しいルール、ゲームをつくったら例がないから必ず勝てる。要するに我々はこれから先、教育なりなんなり社会と接するためにやっていかなければならないことは AI にできないことを探さないといけない</p>

発言者	発言内容等
	<p>んです。読む力、読んで、読むことによってそれを知識として吸収したうえで、判断する力、それとお互いの信頼とか信用構築、これはAIではできませんからね、それとリーダーシップをとる力。どうやってこれからリーダーシップとるかっていうことに関しては、まあある程度、過去の蓄積からAIが答えを出すのかもしれませんが、これも今のところAIにはできない。それとクリエイティブが求められる仕事、それもできない。できないというか人間が最後にやる仕事。やはり残る職業というのはそういうのが多いですね。もう一つ、リクルートの藤原さんが「よのなか科」で言ってますけれども、学ぶ喜び、ものすごく情緒的なのでこの範疇にはいるかどうかは別問題です。だから、未来に向かってAIにできないことに向かって新たな枠組みを作るしかない。今までやってきたことと知識の蓄積によって、何か判断するとか、そういったことは全部、市長も仰ってましたけれども、偏差値を挙げる教育、ものを覚える教育、何か経験の中で判断する教育っていうのはものすごいスピードでなくなります。と思うと、そのための解決策、文科省が示したのは今回の新指導要領の改訂です。</p> <p>今見えている教育現場での変化では、例えば大学入試の大改革、だいぶ変わります。あるいは道德の教科化、小学校では英語が教科化されますし、それから先程から出ておりますプログラミング教育が導入されます。ただ、その下にも書きましたように道德の教科化ということは、新しいことは「道德的であるのか」ということはAIは判断しませんので、医療の現場からいうと、出生前診断であったりね、我々がそれは正しいのかということ判断しなければならない。そのために道德の教科化というのが必要かなと。</p> <p>それから小学校英語の教科化っていうのは、外国人との協働作業っていうのは、グローバルの中で必ず起きますのでそれも必要です。</p> <p>それからプログラミング教育、これはプログラムを育てるためのものでは決していないんです。論理的思考を育てるためのプログラミング教育です。</p> <p>新指導要領の中ではアクティブ・ラーニングという考え方で、これらの改革が全部繋がっています。その改訂の中心は、小中高大の一貫化した学習目標の設定となりますが、それについては、またあとで資料がありますので時間があればやりたいと思います。</p> <p>そして、次に「未来を予測する最も確実な方法は、それを発明することだ」これは1971年にアラン・ケイというノートパソコンを初めて作った計算機学者なんですが、過去の経験から学ぶのはいいけれども、自分で考える。自ら発明する。そういったことを言っています。</p> <p>それから、2014年に文科省は「グローバル化社会を勝ち抜く人材を養成するためには、知識偏重ではなく知識や技能を活用して課題を解決する力、新しい価値を創造する力および、それを促進するための多様かつ総合的な評価が必要である」ということを言っていますが、この背景にあるのは、何度も言ってますけれどもAIであったり、教育の在り方を変えなければならないんだということを、文科省はこの時期から明確に出してきているんですね。</p> <p>そして次に、「予想できない未来に対応するために、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、他者と協働しながら解決していく力が大事」これが主体的・対話的で深い学び、アクティブ・ラーニングです。</p> <p>さて、先程来、新学習指導要領についての話をしていますが、一番大きな転換点というのは小中高大まで一貫化して繋がっているということです。その中で、2番目には観点別学習状況の評価についてこれまで4観点で評価していたのが、今度の学</p>

発言者	発言内容等
	<p>習要領では3観点になりました。ただ一つ減らしたわけではないんですね。新しい観点では「知識及び技能」、知識と技能をくっつけなければならない、知識を使えなければ意味がない。知識をいかに使えるかが重要であると言っているんです。次の観点が「思考力・判断力・表現力等」で、目的のためにどうすればいいのか、どういう状況なのかを考えるという力、判断する力が必要である。最後に「主体的に学習に取り組む態度」。これは上の2つを加味して、自分でものを考えなくてはならない。我々が今までやってきた正解を求めるのではなくて最適解を求めるんですね。それは場面場面で違おうし、その場面場面で正しいことは違うわけです。だから泥棒がいるときに文法通りにその泥棒を捕まえてくださいというのは間違いなんですね。これで3要素となりましたから、今度は評価方法というのが変わるんですね。次のページで文科省が出していますけれども「パフォーマンス評価」「ルーブリック」「ポートフォリオ評価」といった全部ビジネス用語ですね。ビジネス用語をもってくることによって乗り切ろうと、Society5.0の経産省主導の教育改革になっていることは間違いありません。この学習指導要領改訂の方向性というのは、次のページに書いてありますが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」ということで、そのようなことを文科省は提言しています。ただ、非常に難しいという判断しか僕にはできません。今までの評価とは全く違う。我々が今までやってきたことは何だったんだという懸念があります。</p> <p>次のページ、「外国語教育の抜本的強化のイメージ」です。外国語教育が大きく変わります。小学校に外国語教育を入れますから、内容は大きく変わります。</p> <p>最後に、今日一番言いたかったことは理念が変わります。評価方法と評価が変わるということは、教育の理念が変わります。そしてICTを使うことで手法が変わります。評価の方法と理念と手法が両方で大きく変わるなんていうことは、どこの社会にもあまりないんですね。ひょっとすれば教育においても行われるということは、悪い言い方をすればICTが発達してしまったがために、皆がスマホもってタブレットもって色々なことができるようになったがために、ようするにそこに寄りかかって色々なことを解決しようと、そんなふうになんて考えているとしか考えられない。それは文科省もそうですし、政府もそうだと思う。その証拠に先ほども言いましたがビジネスモデルで解決しようとしている。何が起きるかという、最初に言いました現場の先生ありがとうございますと言っておきながら、あとはICTを使ってsociety5.0に飛び込みますよっていうことを言っているんですね。</p> <p>さきほど教育長も触れましたように、僕もコミュニティスクールは興味があることなんですけど、何をしようとしているかと言ったら社会に開かれた教育ということで、社会全体に教育を開放するのではなくて、投げてませんかっていうことなんですね。社会に渡してしまう、こういうことになってくると責任がどこになるのかと、公教育の本来の目的はどこに向かっているのか非常に怖いんです。これだけの変化を突き付けられて、皆さんがどのように思うのか。不安な要素しかない。</p> <p>ただ、そうは言っても文科省がこのようなメニューを出してきた以上、ちょっと止めておきますということとは言えない。教育制度ですからね。そんな中で教育委員会ができることというのは、テーブルの上でそのメニューをいかに自分たちに活用できるか、それを行うためには、自分の中で考えなくてはならない。しかしながら、教員の離職率が昔に比べて多い中で新しい変化を与えてしまうっていう施策は僕は間違っていると思う。</p> <p>これによってますます離職率は高まりますし、教員の競争率は下がります。確実に</p>

発言者	発言内容等
越田市長	<p>下がります。</p> <p>教育長にお願いしたいのは、今後においては、現場の教師にきちんと何をどうするか、何でこれをやっているかということを変えないと、ただ単に ICT 機器を持って遊んで意味がない。それは振り返ればゆとり教育がね、文科省が考えているゆとり教育の理念はすごくいいんですね。だけれども皆が理解できなかった。現場はまったく理解できない。それは教育委員会の責任もあったと思う。これが何で必要かという、きちんと伝えればゆとり教育というのは失われた 10 年になってないわけであって、今回のレベルはゆとり教育のレベルじゃない。今回は理念じゃなくて手法です。ものすごく変わる。そのためにも現場の先生方にもレクチャーしてほしい、それと同時に教育委員会の中にあっても、事務局レベルでも確実に誰に聞かれてもみなさん履行を心がけると。そりゃ批判的な面をもつことも必要だけれどもこうなったから施策を打ちますと理解してもらわないと。子どもたちの未来、10 年後 30 年後の日本がどうなっているかなんかということ懸念しております。だから、この施策に対しては忸怩たる思いがありましてね、だからといって何もできないのはとてもつらいです。</p> <p>まず、何ができるかということに対して、教育の施策でもそうですけれども完全なものはないですね。何かを切り捨てるから今の施策一つひとつがあるんだと、ということは施策の在り方について今あるものについて考える。与えられた環境を十分に活かしながら、やっていただきたいと教育長にはお願いいたします。</p> <p>非常に重要なこととお話しいただきました</p> <p>私、冒頭に非常にありがたいなと思ったこと、これは我々政治家もそうですし、行政職員全てにいえることなんですけれども、しっかりと我々が活動する根拠法って何なのだからということからスタートするべきところ、どうしても行政職員も我々政治家も根拠のところを見失うことがありますので。まさに 12 年前にスタートした時に非常に不安なところから全国の役員をされるまでご活躍していただいたその根底には、根拠を強く大切にしてくださいと、最後の方でも言っておられましたけれども、今やっていることってじゃあ法的な根拠もそうですけれども全体の中のどこにあるのだということが見えないと何をしているのかわからないばかりか、やらされ感に子どもたちも大人たちもなっているのではないかと感じています。</p> <p>委員が仰っている懸念については、私も非常に感じておまして、もはや正解や解答をどこまで極める必要があるのか、記憶や計算なんかに関してはパソコンや電卓の方が正確で、記憶に関してはわからないことがあれば Google のほうが良いという時代になっています。そんな時代に本当に最後何を残すべきなのか、どうやって生きていくべきなのかということなんだろうと感じております。</p> <p>市長になって組織の在り方とか、進化について色々なことを考えるのですが、おそらく進化をするという DNA は、全体の総和としての幸せを増やす行為ではあるんですけれども個人個人の幸せを保証するものではないと。おそらく狩猟から農耕に変わったときに、人口は増えたと全体は幸せになりましたけれど、不自由さが芽生えましたし、科学技術が進展して都市化が進むということは全体的な経済成長はしましたけれども、過労死のような今までなかった問題、つまり個人個人は必ずしも幸せになったとは限らない。そういう中で、初めて我々はこの時代において科学の進化、全体の総和と一人一人の幸せっていうものをどうやって一致することができるのかということを考える時代になったんじゃないかなと。あらゆる仕事もはや 10 年後にはない可能性がある中であって、変化に適応したり自分でルールをつくっていくということ</p>

発言者	発言内容等
石田教育 長	<p>教育の現場がまさに、揺れないものぶれないものというものを、この時期にしっかりとみんなで議論していかなければならないんだなと思っています。</p> <p>そういった意味で、今日、この場で皆さんにご提案いただいた環境と自然との調和をどうしていくのかといったことや、非認知スキルをどのようにして育てていくのかとか、社会の中でどうやって関わって生きていくのかといったことは、まさに加藤委員が大きく全体感をとらえていただいて、皆さんがそれぞれの専門的な分野からの切り口で、今回のひとつのご提案になったのではないかなということ、最後に加藤委員のお話を聞きながら思いました。</p> <p>ご懸念とこれからへのご期待のメッセージをいただきたいと思ひますし、少し市長としてドキッとしたのはもはやITCは鉛筆みたいなものだし、コストは必要な地方財政措置がなされているということでもありますので、私どもといたしましても、今タブレットを一部導入しておりますが、必要性は当然我々としても否定するものではなくて、考え方とかそういうところに対してしっかりと、一つずつクリアしていきましょうということでもありますので、我々としてもしっかりと受け止めていきたいなとそのように感じております。本当にありがとうございます。</p> <p>ありがとうございました。</p> <p>私も各委員の意見を受け止めながら、先ほど加藤委員も言われていましたレイマソコントロールということ意識して常にやっております。その知見が学校現場や教育現場になかなかずっと入っていかないことはあるんですけども、やっぱりそれを活かしていくようにしていかなければ教育委員会をもっている意味はないかなと思ひます。</p> <p>特に加藤委員、正直いいまして前段の部分は加藤委員とよく話をしております、後段の部分で今の施策を全面肯定ではなくて、そこに批判的な目もちながら、今教育の本当の意義が問われているときだということが響きましたので、その辺を見失わずに頑張っていきたいと思ひます。ありがとうございました。</p>
越田市長	以上をもちまして、第1回目の総合教育会議を終了いたします。

以下会議の事項を記録し、相違ないことを認めたので、ここに署名いたします。

令和元年12月6日

川西市長 越田 謙治郎

川西市教育長 石田 剛